絆

宮下　健太

「先生とは一緒にバレーをしたくない。」

本校の女子バレー部は、三年生二人、二年生六人、一年生十人で夏の大会を迎えた。三年生は二人とも中学でバレーを始め、一人が部長、もう一人は主将だった。昨年の三年生はお世辞にも後輩思いだったとは言えず、二年生は全員小学校からの経験者。そんな学年に挟まれた三年生は顧問が思うより苦労をしていたと思う。その上秋から冬にかけての戦績も芳しくなかったから、顧問に不満をぶつけたくなるのが中学生の心情というものだろう。

それでも、鷹揚に構え、隙を見せずにいれば何とかなっただろうが、未熟にも私はそうではなかった。だから、何回も主将とぶつかり、「もう辞める」と言われた。部活ノートに「先生があのとき…」「先生の…が嫌だ」と書かれたこともある（しかも一ページが埋まるほど）。ちなみに冒頭の言葉は、私と主将の関係がどん底まで行っていた時期に彼女から直接言われたものである。

当時の私は、とにかく同僚に愚痴をこぼした。なんとも無責任な顧問である。当然、その後を引き受ける人がいるわけもなく、今年も顧問になった。――愚痴を言った以上、自分が最後までやるしかない――そんな心持ちで。

そして迎えた四月。どうしたことか、主将は後輩の愚痴をこぼすようになった。何かにつけて不平不満を言いたいんだな、と感じるとともに、散々不満をぶつけた相手に愚痴をこぼすとはどういうことか、と疑問が湧いた。担任に相談すると、「先生を信頼してるからじゃない？」と返ってきた。半信半疑だったが、彼女の見方が変わる出来事が起きたのは夏の大会の一ヶ月前のことだった。

その日、私は所用で部活に行けなかった。すると、急に部員が職員室に来て、「主将の指示の意味がわかりません」と口々に言う。主将への不満を聞いた後、顧問が指示を出せばその場は収まるかと思って体育館に行こうとしたとき、なんと廊下の曲がり角に主将が立っていた。すぐに他の部員を体育館に行かせ、主将と一対一で話をした。

「何の練習をやりたいか聞いても『別に…』としか返っ

てこないから、『声出し練習をしよう』って指示を出したのに・・男子がサーブ練習を始めたらみんなそっちに気が行って私の指示を聞いてくれない。もう嫌だ・・」

なんて涙ながらに言うものだから、とにかく焦りまくりである。しかも、「早く負けて引退したい」「このチームで勝ってもうれしくない」などなど・・予想もしない言葉が次々と彼女の口から出てきた。「唖然呆然」とはこういうことかと思った。

しかしながら、――内容はともかく――彼女が自分に本音を話している。これは何か手を打たなくてはならない。そう思った私が提案したのは、「色々と注意するのは全部俺がやるから、自分が一生懸命やることだけ考えなさい」ということだった。

迎えた夏の大会。あんなチーム状態で勝てるわけもなく、消化試合を残すのみとなった。万が一の奇跡的なことが起これば勝ち抜けなくもなかったが、私は三年生二人にこう言った。

「次が最後になると思う。途中の選手交代も一切無しで、二人とも出すよ。」

消化試合とは言っても、お互いに最後の試合だから、応援にも力が入る。点差を離される場面もあったが、こちらがセットポイントを握った。

二年生がレシーブをして、主将がトスを上げた。トスを上げた先には、部長がいる。相手がシード校だったら易々と拾われたであろう緩やかなスパイクが、きれいな順回転で弧を描き、相手コートに落ちた。主将はトスが苦手で、よく反則を取られていた。部長も部長で、無回転のスパイクをよく打っていた。私が記憶する限り、主将のトスを部長が打って決めたことはそれまで一度もなかった。

最終試合には勝利したものの、三年生はその試合を以て引退となった。部長は顔を泣き腫らし、主将はぎこちない笑顔を作っていた。

二人だけの三年生。どちらかがいなかったら最終戦でのあの一点は生まれなかった。もしも部活動で「絆」というものが生まれるとするのなら、まさしくあの一点は、三年間共にした仲間との絆そのものだったのだ。

その後、特に主将から感謝の言葉をもらうこともなく、彼女とは部員と顧問という関係ではなくなった。しかし、もし彼女と私の間にも「絆」というものが生まれていたとしたら、それはいつだったのか。言うまでもなく、夏の大会の一ヶ月前。彼女が涙ながらに私へ本音をぶつけたあのときだった。少なくとも私は、そう信じている。

部活動は難しい。勝てば顧問と部員に信頼が生まれる

とは限らないし、顧問が一生懸命だったら部員が必ず応えてくれるとも限らない。部活動の時間短縮やクラブチームへの移行が叫ばれている昨今だが、部活動は「絆」の生まれる場所である。それを心に留めて、これからも十六人の部員たちとともに歩んでいきたいと思う。

（みやした　けんた　佐久市立望月中学校）